防衛省の資料に活断層の証拠が!?

2月24日に行なわれた、沖縄県辺野古沿岸部（名護市）埋め立ての賛否を問う県民投票は、反対票が7割を超える結果に終わった。米軍普天間基地（宜野湾市）の移設をめぐる問題は、今後さらに対立や混迷が深まるのは必至だ。

しかし、その辺野古では今、「軟弱地盤」という別の問題が持ち上がっている。地元紙記者が解説する。

「きっかけは昨年3月、基地建設反対派が防衛省に開示請求した資料でした。そこには、埋め立て区域である大浦湾海底の地盤の硬さを示す『N値』が、一部でゼロと記されていました。これは〝マヨネーズ状〟といわれるほどの軟らかさです。それでも防衛省は工事を中断せず、土砂を投入し続けているのです」

今年1月になって、安倍晋三首相は軟弱地盤があることを認め、埋め立てを進めるには地盤改良が必要だと明言。改良工事では約7万7000本の砂杭を打ち込むという。これで工期に13年、追加費用は1500億円に上ると沖縄県側は試算している。

昨年から指摘されていた辺野古埋め立て区域の軟弱地盤を、今年1月になって認めた安倍首相。地盤の改良工事が必要だと明言した

これとあわせて、辺野古には「活断層」の問題も浮上している。

「新基地が造られる場所に、2本の活断層があるといわれています。そのうち1本は建設予定であるV字形のふたつの滑走路を突っ切るように延びていて、大きな地震が来たらひとたまりもない。防衛省は認めませんが、複数の専門家が活断層の可能性が高いと指摘しています」

活断層について簡単に説明すると、地下深くにある岩の塊には、絶えず押されたり引っ張られたり複雑な力が働いている。それに耐え切れず、岩の一部が壊れて地層にズレが生じたものが「断層」で、地震は断層ができるときの衝撃だ。

地下や地表にはたくさんの断層があるが、なかでもおよそ260万年前から現在までに動いたものを「活断層」と呼ぶ。こうした比較的新しい断層は、これからも動くことが予想される。つまり、活断層がある場所は、地震が起きる確率が高いといえるのだ。

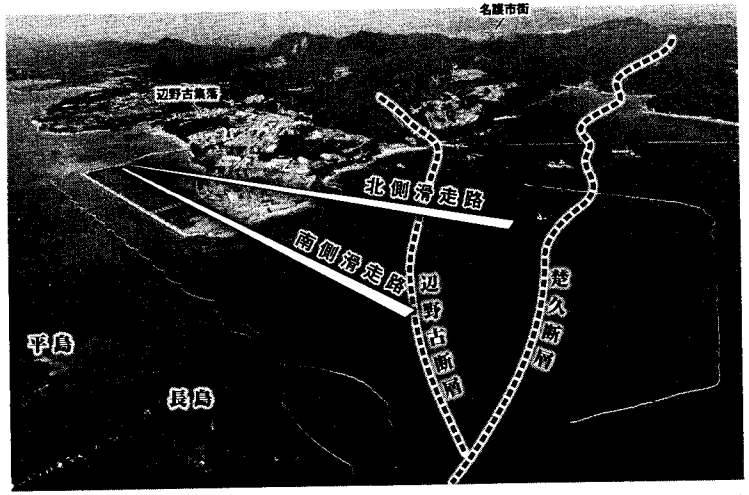
では、辺野古にあるとされる活断層はどんなものなのか。琉球大学の名誉教授、加藤祐三氏（岩石学）が解説する。

「私が活断層だと推定しているのは、大浦湾西岸の北西から南東に延びる『辺野古断層』と、湾奥から延びる『楚久断層』です。辺野古断層はキャンプ・シュワブ（名護市と国頭郡宜野座村にまたがる米軍基地）の中を通り、埋め立て区域の海底へ抜けると考えられます。一方、楚久断層は、埋め立て区域のすぐ東を通っています。断層の長さは、陸側と海側を合わせると共に10kmを超えます」

この場所に活断層があるとする根拠は3つあるという。

「まず、那覇防衛施設局（現・沖縄防衛局）が2007年に作成した『推定地層断面図』です。図には辺野古沖に深さ100mほどの落ち込みがあり、琉球層群（琉球石灰岩）が上下に切断されています。辺野古の地層は下から、嘉陽層、琉球層群、沖積層の順番で構成されていますが、琉球層群はサンゴや貝殻などが堆積し、数十万年前に形成されたもの。この地層が切れているということは、時期的に活断層といえるのです。次に、沖縄の地質を詳しく調べた文献『名護・やんばるの地質』には、辺野

埋め立て工事に使う砕石を運ぶダンプカーの列



現在の辺野古沿岸部の様子。V字形の2本の滑走路を建設するために、広大な海の埋め立てを計画している。工事は13年かかるともいわれる

県民投票は「賛成」「反対」「どちらでもない」の3択で、反対票は43万4273票に上った。玉城デニー知事は民意が示されたとの認識を示した

沖縄「辺野古断層」が米軍V字滑走路を破壊する!!

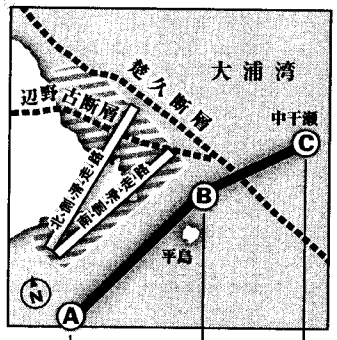
新基地建設予定地の軟弱地盤に巨大地震を引き起こす活断層が!?

「基地建設のために沖縄の海を埋め立てるのはやめてくれ!」地元住民からの強いノーが突きつけられた今回の県民投票。それでも工事を進め続ける安倍政権に新たな逆風か? なんと建設予定地の真下には大地震を起こす活断層が存在! 専門家が警告する辺野古埋め立て問題の新事実を緊急解剖!!

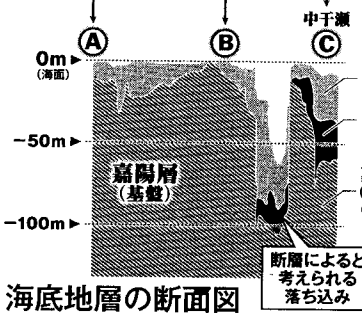
普天間基地の移設先として辺野古の新基地建設は進められようとしているが、今回の県民投票による反対の声に加え、「軟弱地盤」や「活断層」の問題も浮上している

＝埋め立て区域

辺野古新基地建設予定地の埋め立て区域と断層



沿岸部を埋め立てて2本からなるV字滑走路を建設予定。それを横切るようにふたつの断層があるが、複数の専門家が活断層だと指摘する



防衛省が公開した辺野古沖の海底地層の断面には、比較的新しい地層の「沖積層」に100mほどの落ち込みが見られ活断層の可能性がある

海底地層の断面図

週刊プレイボーイ 2019.3.18